今こそ医学教育の充実をはかるとき

歯学部長　　瀬戸晥一

「学術の動向」4 月号に掲載された拙文「医歯二元論から知の統合へ」は各方面から意外な反響が寄せられた。「知の統合」は日本学術会議から発信された最近の対外報告で、自然科学と人文科学が全く別個に存在するのではなく、連携統合することによって日本から新しい学術文化が生まれるとするものである。しかし医歯薬学あるいは理工科学のような実学領域は、哲学や文学などの形而上学と比べて統合は難しいであろうというのが拙文の切り口である。その中でも医学の一分野である歯学が、だんだん隔たった存在になってしまっているのはどうしたことか。実学の中でも医学や工学は、アカデミズムが確立するよりずっと以前に「業」が定着し、排他的同業組合が先行するようになるのは世界の趨勢であろう。医学領域ではすでに医業が複雑多様に展開しているため、「学」が「業」を主導していくことは、それほど難しいことではなくなっているように窺える。これに対して歯学領域ではいつの間にかアカデミズムが去勢されて、完全に「業」の中に閉じ込められている感すらある。そこで今こそ歯科医学が奮起して学術的にアイデンティティを確立すれば医学医療の一翼を担いつつ医歯二元論を堅持できるというのがかねてよりの持論であり、今回もそのような論旨にそって筆を進めた積りであった。

ところがその後、福岡歯科大学の田中健三理事長からご丁重なお手紙をいただき、問題意識としては共通の基盤に立った上で、歯学は生命科学を基礎として口腔の疾患治療と予防を担当する「口腔医学」を創設して医科医療体制と一体化し、「医歯一元論」に立脚していこうとする新しい考え方を吐露され、「学術の動向」に投稿したい旨ご挨拶をいただき、その原稿を同封された。そこで九大で講義の序もあったので、一夕招かれて論議する機会を得た。現状歯科医学・歯科医療の脆弱性に関しては認識を共有するものの、打開の隘路については正反対の見解なので勿論一夜で解決など望外であるが、なぜか爽やかな夕べであった。

私は歯学を、身体で最も微妙で複雑な口腔をフィールドとした機能回復医学としてとらえ、医学と工学の接点とも云える自然科学の深遠な分野と考えている。しかし基本的に医学と歯学は医療を共有分担するもので、歯科医師は医学医療を周到に身につけておくことが前提となる。この点に関しては歯科医学教育百年の歴史のなかで前半は創設当時の東京高等歯科医学校に象徴されるように、医学教育の基礎の上に立った歯学教育が成り立っていたように思う。しかし後半になって戦後歯科大学が設立されてからは、いつのまにか歯学は医学から遠く離れてしまい、自然科学の中でも浮き上がった世界になってはいないだろうか。

昨今歯科医療にかかわる様々な事故、あるいは歯科医業の範疇での不祥事が相次いで起こり、歯科医師の資質が国民から問われていることは間違いない。沢山の問題があり過ぎて整理もできず、解決を先送りしがちであるが、現状はもうそれが許

されない事態となっている。ここで静かに国民の声に耳を傾けてみると、「歯科医師は本当に医師なのか？」という素朴な疑問が聞こえてくる。現状では「心配御無用」と胸を張って言い切れるかどうか自信がない。しかしここは何としても歯科医学教育の担当者が答えを出さなければならない場であろう。

　歯科医学の教育に医学教育を一層充実させることはそれほど困難なことではない。我々の意識改革さえなされればパラダイムの変更は可能であり、「医歯一元論」にまで遡る必要はないと信じている。医歯一元論の弊害は計り知れないが、このことについては別の稿に譲りたい。

　いま文科省や学術会議でメディカルスクール構想が真剣に論じられている。韓国が米国式メディカルあるいはデンタルスクール化に踏み切り、その成否が注目されるところであるが、わが国では慎重論が根強い。いま直ちに日本が韓国に追随するとは思えないが、医科医療の方が相当に行き詰っている現在、日本の医学教育が大幅な改革を迫られることは必至であろう。その時にこそ日本の歯科医学教育の現場は国民が納得するパラダイムの変更を積極的にするべきである。伝統的に医科の後塵を拝している日本の歯科医業であってみれば、医学教育における大きな変革の嵐に、歯科がむしろ積極的に巻き込まれて、パラダイムの変更を行う絶好のチャンスを逃してはならない。